

スイゼンジナ

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
植え替え栽培												
切り返し栽培												
主な作業	<p style="text-align: center;">挿移 切 定 収 芽植 返 植 穫 し</p>											

スイゼンジナ キク科、原産地：熱帯アジア
 作物名 スイゼンジナ
 学名 *Gynura bicolor* DC.
 作型 露地

ができ、その前後は保温、加温により周年栽培ができる。

切り返し栽培：パイプハウスを利用して、夏季は露地または雨よけ栽培とし、冬季はビニルを展張して夜間にトンネル被覆を行うことで周年栽培ができる。春季に生育適温となったら、芽を数節残して切り返し、植え替えを行わずに株を更新する。

技術体系

性状

東アジア原産のキク科多年草で、日本伝来は、1759年頃といわれている。奄美大島、九州南部に野生化しており、熊本市水前寺で古くから栽培され、茶花などに利用されていたため、この名がついた。株は分枝が多く、直径 60cm 程度にこんもり茂る。全株無毛で、茎は円形で紫色をしている。葉はやや多肉で長円形のぎざ葉、表面は緑色、裏は紫色をしている。秋～冬に黄赤色の花をつけるが、霜に弱いため、枯死して露地では花をみないことが多い。不稔のため繁殖は挿し芽で行う。高温、多水分、多肥料を好み、夏季の高温多日照で紫色が淡くなる。現在、営利栽培は少なく、石川県では「金時菜」として商品化している。主に業務用需要が中心で継続出荷が必要である。

1 作型の特徴

植え替え栽培：夏季と冬季を別ほ場で栽培する際に有効な栽培方法である。4～11月まで露地栽培

2 適応地域

県内全域

3 栽培条件

(1) 気象条件

生育適温は 20℃～25℃で 15℃以下や 35℃以上になると生育が悪くなる。挿し芽には 20℃～25℃前後が適する。

(2) 土壌条件

排水のよい耕土の深い肥沃な土壌が最も適している。

4 施設装備

(1) 夏季の露地栽培は特になし。施設栽培を実施する場合は雨よけハウスを用いる。

栽培技術

1 育苗

挿し芽は、20℃以上の温度があればいつでもでき、十分な湿度を保つと7～10日でほとんどが発根する。

新芽の先端を6～7節で切りとり、下葉を3～4枚除去し、砂などの挿し床に挿し芽し、十分な湿度を保つ。温度は平均して20～25度が望ましい。発根後、4～5号ポリ鉢に移植して15～20日間育苗し、十分に根鉢を形成させて定植する。定植前に15節前後で摘芯し、側枝を発生させて、株張りをよくする。育苗用土は他の野菜と同じものでよい。

2 定植

やや湿潤で肥沃な土壌が最も適し、他の葉菜類と同じように特に多肥、多灌水による増収効果が期待できるので、できるだけびのびと育て、草勢を保って柔らかい新芽をすなおに伸ばすようにする。畦幅60～70cm、株間35～40cm 1条植、4000～4500株/10aの栽植密度を標準とし、黒マルチ等で雑草抑制を兼ねて土壌水分保持をする。

施肥量 (kg/10a)

	N	P ₂ O ₅	K ₂ O	備考
基肥	20	25	20	緩効性肥料を1ヶ月に1回N 1～2 kg/10aを目安とし、草勢により施肥量、時期を変える。
追肥	8	4	8	
合計	28	29	28	

地力で作る作物なので、堆肥、石灰、リン酸など土壌改良資材は十分に施用する。夏季高温時に、茎が硬化し、紫色が淡くなりやすい場合は黒寒冷紗等で遮光する。

3 病害虫

病気はほとんどみられない。害虫はアブラムシ等他の葉菜類と同様に定期的な予防を行う。

4 収穫

25cm程度に伸びた新芽を手折りして収穫し、水洗後芽先をそろえて下切りしパッキングする。収穫下部に3～5節残し、次の新芽の発生源を作っておくことが肝心である。

5 その他

過繁茂になった時は、適当に剪定すると通風、採光がよくなり、葉腋から再び新芽が出てくる。

冬季に加温栽培を行った場合は、花芽分化が促進されて開花し、商品価値を失う。花芽分化は短日条件下で促進されるため、電照による抑制は可能である。